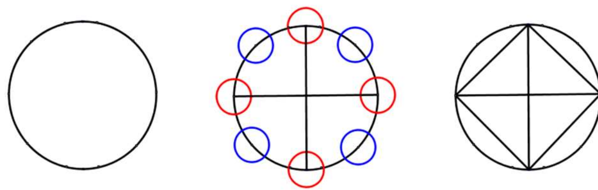
４８声音符の生成原理

２０２２年2月２４日

青天





目次

前書

カタカムナ文献に登場する「八鏡之文字」と呼ばれているものがどのような原理で創られたのか、文献研究を志すものとして一度は考えたことがあるだろう。ヤタノカカミ図象から、どのような生成原理で４８の図象と音を割り当てていったのか、原日本人の精神に少しでも近づければという思いで考察した。

言語は、おそらく地球人が独自で発明したものではなく、ある時期に地球外生命体によって地球人に伝授されたものだと認識している。その言語も、英語アルファベット（２６文字）のような文字数（音数）の少ない言語と日本語４８音（４８文字）のような文字数（音数）の多い言語の２種類に大別できる。

人間を人間たらしめている「言語」の存在、高次の精神を創り出す原動力となっている「言語」の本質について考える時、カタカムナ文献は貴重な原資料であることが判る。我々日本語を話す日本人は、この４８音という多音性の言語を受け継いだ原日本人の末裔であることをもう一度自覚してみようではないか。

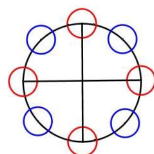
相似象会誌３号で開示された４８声音符の表も、１００％鵜呑みにせず、じっくりヤタノカカミ図象からどんな生成原理に基づいて４８図象を構築したのかを考えることで、自然に４８声音符をマスターすることができる。相似象会誌９号で開示された８０首を精査することで、正確な４８声音符のカタチが解る。

日本語４８音を表す幾何図象群（４８声音符）の生成原理について考察した内容をまとめた。文献研究を志す個人研究者へのささやかなヒントになれば幸いである。まずは時間をかけて、文献の図象群と向き合うことを勧める。

ヤタカカミ代数位相幾何図象

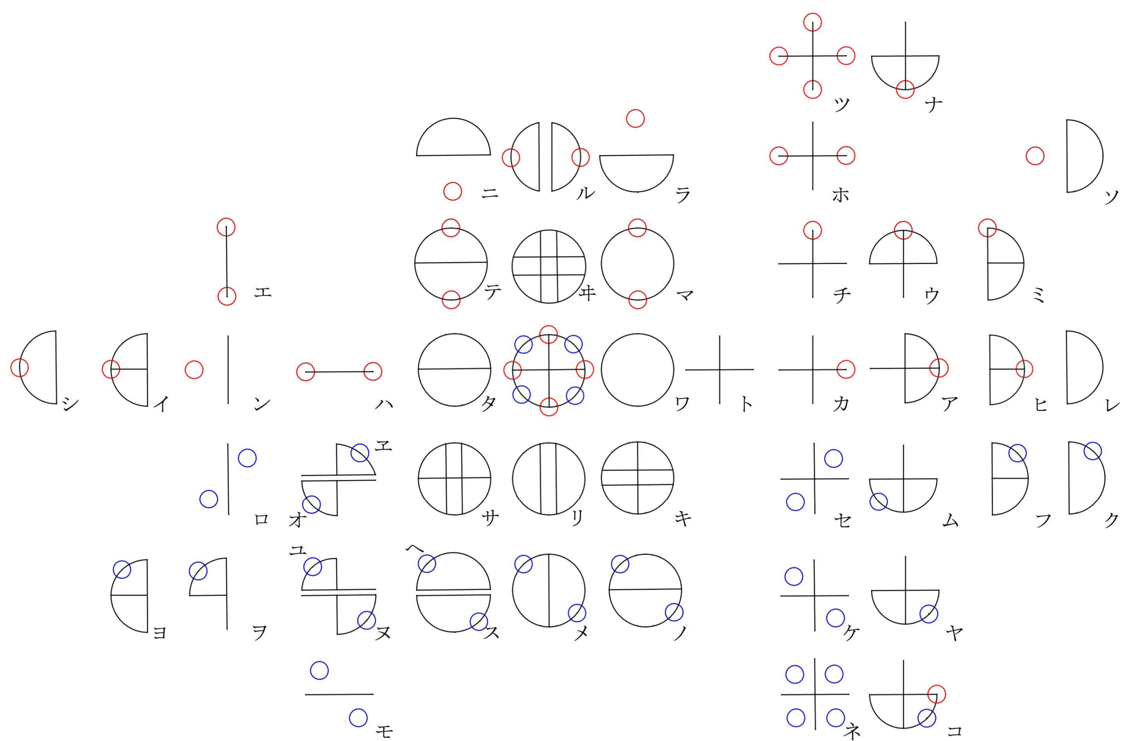
ヤタノカカミ図象と４８声音符

ヤタノカカミ図象



４８声音符

ヒフミヨイ　マワリテメクル
ムナヤコト　アウノスヘシレ
カタチサキ　ソラニモロケセ
ユヱヌオヲ　ハエツヰネホン



４８音とプラトン立体

生成原理を考える前に、最初に疑問に思ったのが「なぜ４８音なのか？」ということ。逆に、この疑問に答えることによって、何かしらの指標が得られるのではないかと考えた。

そこで、幾何図象という普遍的な構造を秘めた原日本語には、やはり、地球外生命体の言語遺伝子が色濃く影響しているだろうと予想し、宇宙における、宇宙を記述できる、何か普遍的な原初の元型（カタ）があったに違いないと仮定した。宇宙を記述できる唯一の言語、純粋数学、それは幾何学かも知れない。

幾何図象と幾何学、この２つの接点に気づいてから、４８声音符を一つ一つ分類精査しながら何か共通性がないか検討した。着目したのが、小円の数だった。

声音符には、小円の付いていないもの、１個付いているもの、２個付いているもの、４個付いているものの４つに区分できる。３個付いている声音符は存在しない。これは、一体、何を意味するのだろうか？

０に背景、１に単独、２に対（ペア）、４に双対（４相・直交する２組のペア）というイメージを持った。双対原理（双対性）が働く構造における、何かしらの仕組みが表されているように感じた。

純粋幾何学と双対性から、「プラトン立体」を連想した。

プラトン立体には、双対特性多項式という代数式がある。

$$x^3 \cdot y^{(-1)} + 2x^2 + 2(n^2 + 1)(x + y)(x + 2y) + x^{(-1)} \cdot y^3$$

プラトン立体は、全部で５個あるが、３つの双対正多面体群に分類できる。それが、正４面体（n=0）自己双対、正６面体と正８面体（n=1)、正１２面体と

正２０面体（n=2）である。
上式の(x)＝私、(y)＝あなた、とすると私(x)とあなた(y)を結ぶ線分の数が(xy)の係数として表現できる。ここに着目して、言語（音数）の数を算出した。

（計算）

(xy)に関する係数は、上式の(n)が関与している多項式を展開して求める。

$2(n^2 + 1)(x + y)(x + 2y) \rightarrow 6(n^2 + 1)xy$

n=0　→　6xy
n=1　→　12xy
n=2　→　30xy

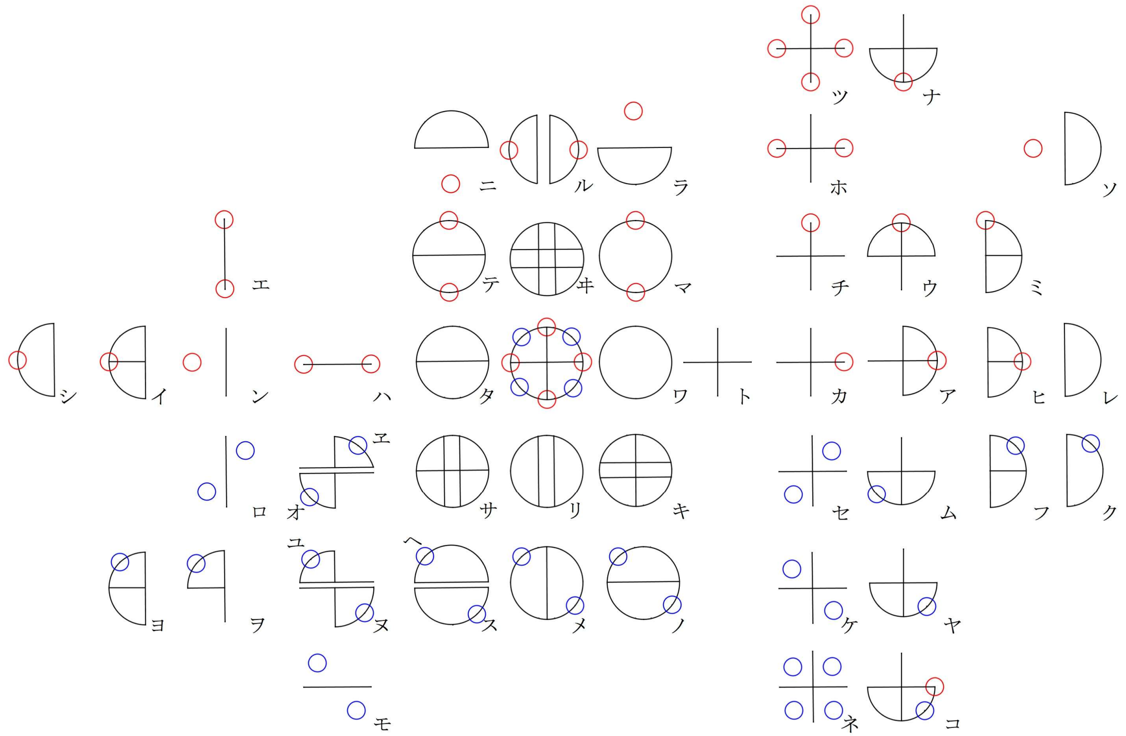
幾何学的には、双対正多面体を構成する線分の数に等しいことが解る。

言語（音数）の総数＝６＋１２＋３０＝４８。

幾何図象で構成された４８声音符の４８という数は、プラトン立体という純粋幾何学から導き出される一つの結論のように思う。

プラトンも知らぬ日本語ヨソヤコト

４８声音符を分類する



６つの基本的な背景図象（小円を考慮しない）を抽出して、そこから、４８声音符の分類を試みた。

48 = 2 + 3 + 5 + 8 + 10 + 20　　以下の（　）内はその数。

１：横軸のみ（2）
　ハ・モ

２：縦軸のみ（3）
　エ・ロ・ン

３：1/4 円（5）
　ユ・ヱ・ヌ・オ・ヲ

４：十字（8）
　　ト・カ・チ・ホ・ケ・セ・ツ・ネ

５：全円（10）
　　ワ・タ・リ・サ・キ・ヰ・マ・ノ・メ・テ

６：1/2 円（20）
　　コ・ヒ・ア・レ・フ・ク・ミ・ウ・ラ・ヨ
　　ヘ・イ・シ・ソ・ム・ナ・ニ・ヤ・ス・ル

さて、プラトン立体から算出した４８に対して、上の６つの分類から得られた式を検討すると、

４８＝6＋１２＋３０＝2＋3＋5＋8＋１０＋２０
＝（2＋3＋1）＋（5＋8－1）＋（１０＋２０）
＝（1＋2＋3）＋（5＋7）＋（３０）

という関係が浮かび上がる。

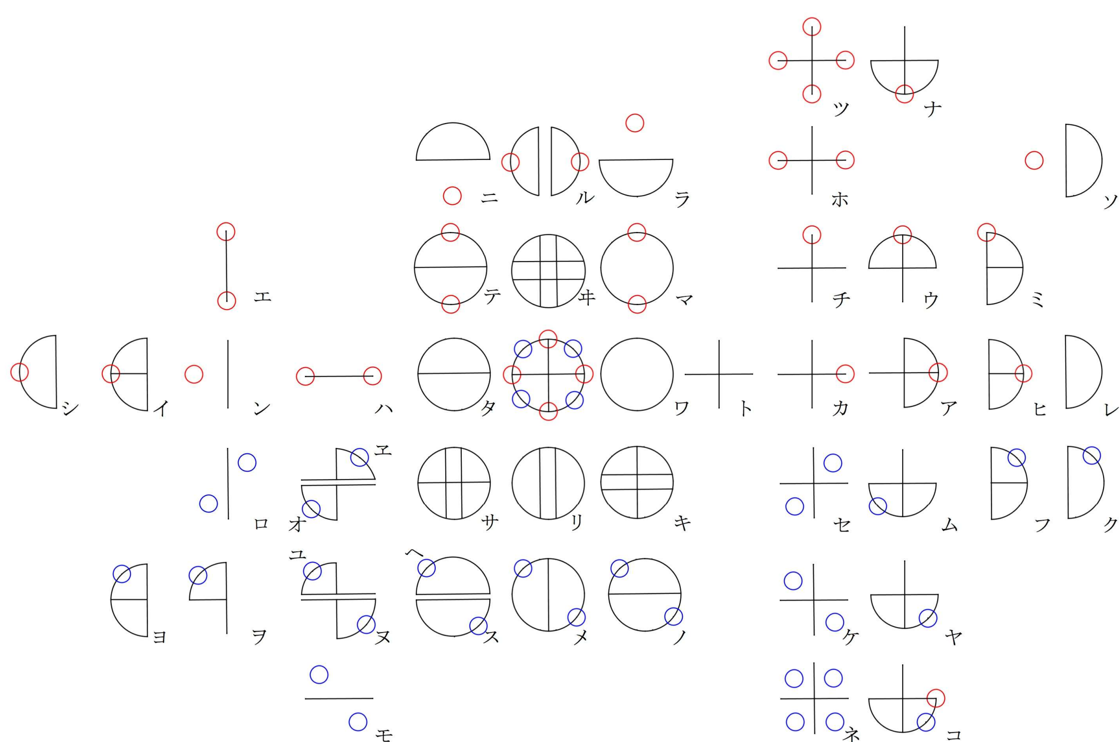
第４分類の「ト」図象（十字）を、第１・第２分類に加えると、すべて辻褄が合う。第１・第２・第４分類は、その背景がすべて直線だけで構成された図象群である。そのうち、ヤタノカカミ図象の土台となる基本形の一つである「ト」図象を一番先頭に持ってくることで、「ト」図象の重要性を強調した。

６つの基本的分類は、究極は２つにまで減らせる。それが、「ト」図象で抽象される直線系（第１・第２・第４分類）と「ワ」図象で抽象される円弧系（第３・第５・第６分類）である。この２つの図象「ト・ワ」が、ヤタノカカミ図象の土台となっている。

プラトン立体の面数が増す（正４面体→正２０面体）のと同期する形で、直線系から円弧系に図象群の数が増えてゆく様子がわかる。

４８声音符の幾何構造表記法

４８声音符の分類をベースに幾何図形を描かず、カタカナ以外の表記方法について考案した。この目的は、幾何構造をより深く理解し、図象符（声音符の連音を１つの図象で表現）への展開に際して、図形を描かずにテキストファイルで図象符を表現するためである。



背景構造をアルファベット４つ（a b c d）、小円配置を数字９つ（0〜８）で表現できる。

a = 十字
b = 横軸のみ
c = 縦軸のみ
d = 大円（全円・1/2 円・1/4 円）

0 = 小円なし
1〜8 = 小円位置（ヒ= 1〜ヤ= 8）

小円が背景図象に重ならない３つ（ソ・ラ・ニ）は、表記の最後に「'」をつける。1/4 円で、小円がヨの位置にあるヲは、表記の最後に「-」をつける。

以上のルール（小円位置 ，背景）で、声音符（４８）を表記すると、

１：横軸のみ（2）
ハ(15,b)・モ(48,b)

２：縦軸のみ（3）
エ(37,c)・ロ(26,c)・ン(5,c)

３：1/4 円（5）
ユ(4,bcd)・ヱ(2,bcd)・ヌ(8,bcd)・オ(6,bcd)・ヲ(4,cbd-)

４：十字（8）
ト(0,a)・カ(1,a)・チ(3,a)・ホ(15,a)・ケ(48,a)・セ(26,a)・ツ(1357,a)・ネ(2468,a)

５：全円（10）
ワ(0,d)・タ(0,bd)・リ(0,ccd)・サ(0,bccd)・キ(0,bbcd)・ヰ(0,bbccd)・マ(37,d)・ノ(48,bd)・メ(48,cd)・テ(37,bd)

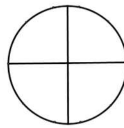
６：1/2 円（20）
コ(18,ad)・ヒ(1,cbd)・ア(1,ad)・レ(0,cd)・フ(2,cbd)・ク(2,cd)・ミ(3,cbd)・
ウ(3,ad)・ラ(3,bd')・ヨ(4,cbd)・ヘ(4,bd)・イ(5,cbd)・シ(5,cd)・ソ(5,cd')・
ム(6,ad)・ナ(7,ad)・ニ(7,bd')・ヤ(8,ad)・ス(8,bd)・ル(15,cdcd)

図象符群の幾何構造表記法

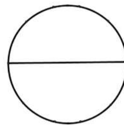
声音符を図象符にすると、自動的に枠（大円）がつくので、原則「d」は不要だが、文献にもあるように「ワ・マ」の単独図象符表記の場合は「d」を使用する。

声音符　→　図象符（背景図象・小円位置）
ワ(0,d)　　ワ(d0)
マ(37,d)　　マ(d37)

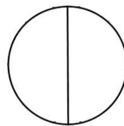
a（十字）系の背景図象



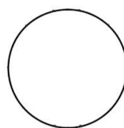
b（横軸）系の背景図象



c（縦軸）系の背景図象



d（大円）系の背景図象



それでは、練習問題を始めます。

「カムナカラエヒメサヌキチアワトサチ」を声音符で表記すると、

1,a 6,ad 7,ad 1,a 3,bd' 37,c 1,cbd 48,cd 0,bccd 8,bcd 0,bbcd 3,a 1,ad 0,d 0,a 0,bccd 3,a

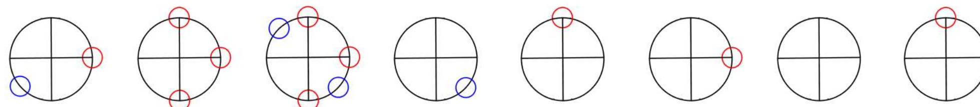
これを図象符で表記すると、

a16 a137 a13478 a8 a3 a1 a0 a3

となります。

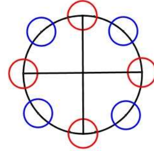
わざわざ幾何図象を描かなくても、英数字で、図象符が表記できます。

それでは、図象符を復元します。



ヤタノカカミ図象の型

ヤタノカカミ図象



１：大円は、変遷・循環軌道を表している。

２：小円は、該当単位・系の状態を表している。

３：小円がない図象群は、全体に影響を及ぼす状態を表している。

４：小円奇数位置の図象群は、確定思念が働く。
直線と小円中心が交わり固定状態（可動範囲が極端に狭い）にある。

５：小円偶数位置の図象群は、不確定思念が働く。
大円円弧を小円が自由に可動できる状態（可動範囲が広い）にある。

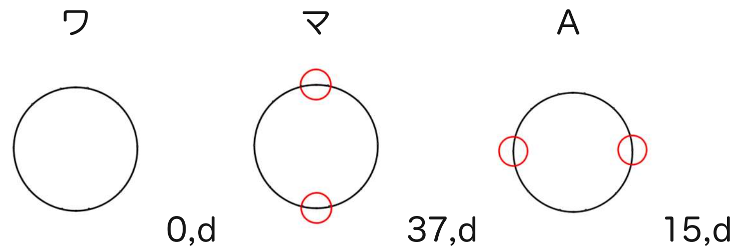
６：十字は、双対構造を表している。大円を裏で支える仕組みを抽象。
実際には、描かれていないもう１つの十字（青４つで構成）がある。

７：８つの小円によって、２つの直交座標が読み取れる。
ヤタノカカミ図象は、SU(2)として幾何抽象できる。
四元数として、代数的な情報も含まれているだろう。

８：縦軸を境界にして、右側が潜象・左側が現象、という基本構造がある。

石仏の指にヤタノカカミの紋

声音符の型（1）



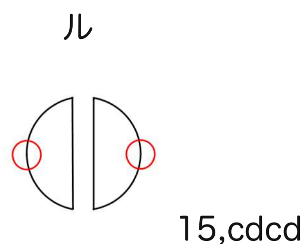
ワ（0,d）図象から、最初に方向性が発生した状態を抽象したのがマ（37,d）図象であるが、A（15,d）図象は４８声音符の中には存在しない。この存在しない図象を手掛かりにして、声音符の生成原理について考察を深めてゆく。

「マ」の小円は、縦軸両端に直線なしで配置されている。ヤタノカカミ図象の型（８）で説明したように、縦軸が現象・潜象の境界であることを示唆している。全体性を示す「ワ」には、方向性が現れた時に２つの穴が存在していることがわかる。これが「マ」の本義である。

２つの穴は、対（ペア）となって現れる。さて、「A」が存在しないということは、全体性の中で、横軸両端に同時に２つの穴が存在できないことを意味する。穴とは、該当単位・系を抽象した表現であることに留意されたし。

横軸両端に、２つの穴が存在できる条件とは何だろうか？

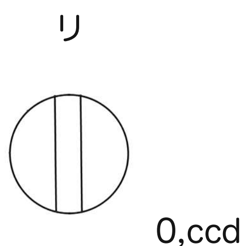
その答えが、ル（15,cdcd）図象である。



「ル」が存在することで、横軸両端に２つの穴が同時に存在できる条件として、「ワ」が縦に２つに割れて境界部分が空洞になることがわかる。「ル」の分極思念はここから働く。

横軸両端の穴をなくして、全体性を保つには、どうすれば良いだろうか？

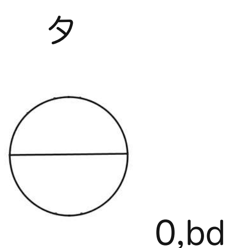
その答えが、リ（0,ccd）図象である。



「リ」は、全体性を保ちながらも現象・潜象を分割・分離する働きを示す。

それでは、全体性を保ちながら現象・潜象を分割・分離しない、そんな働きの声音符が存在するだろうか？

その答えが、タ（0,bd）図象である。

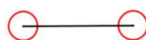


横軸両端の穴はなくなり、全体性「ワ」に横軸が現れる。これが、「ポテンシャル場」の誕生である。横軸は、物質性・空間性を抽象している。

実際の「場」が誕生するには、全体性を失うことで表現できるだろうか？

その答えが、ハ（15,b）図象である。

ハ

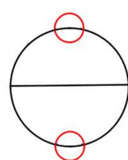


15,b

全体性は失ったものの、しっかり「場」が誕生し、現象として穴が現れる。しかも、潜象側にも、それに対応する穴が存在していることがわかる。

次に、「マ」には縦軸は現れないが、テ（37,bd）図象のように横軸が現れるものがある。これが何を意味するのか、考えてみよう。

テ

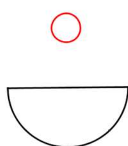


37,bd

「テ」＝「タ・マ」という図式が見えてくる。「テ」は、図象符にしても同じ象になる。「テ」は、「マ」を維持しながら「タ」の働きをすると考えられる。これは、全体性を保ちながら方向性が現れ、ポテンシャル場が形成された様子を抽象している。物質性・空間性を発動して物質化を引き起こす型のようだ。

「テ」＝「ラ・ニ」という図式もある。

ラ　ニ



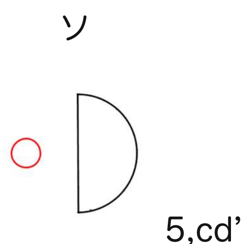
3,bd’



7,bd’

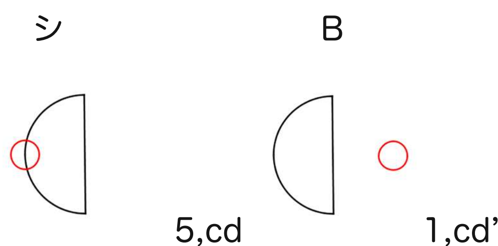
全体性「ワ」の横軸を境界に２つに分割した背景図象に、それぞれ浮かんだように配置された穴によって表現されているのが、ラ（3,bd'）・ニ（7,bd'）図象である。それぞれの背景図象の影響を受けて、穴から情報が出入りする様子を抽象している。「ラ」は現象化の始まりで、「ニ」はその定着を意味する。

ここから、背景図象が相似なソ（5,cd'）図象について考察する。



「ラ・ニ」の横半円に対して、「ソ」は縦半円となる。しかも、潜象側に半円がある。これは、潜象側の影響を受けて現象側に情報が伝達される様子を抽象している。穴＝該当単位・系、とは別の領域から間接的に作用が及んでいる。

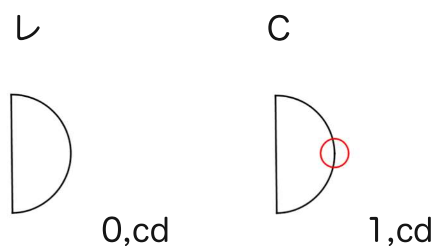
これに対して、シ（5,cd）図象は、現象側に縦半円が存在する。



現象側に顕現する形で情報伝達されていることを抽象している。「知る」の「シ」である。「ル」の片側（現象側）が、しっかり描かれていることがわかる。

一方、B（1,cd'）図象のような現象側に背景を持つ図象と、潜象側に穴を配置した図象は存在しない。

４８声音符は、潜象側に背景を持った図象が多いことがわかる。
それでは、レ（0,cd）図象はどうだろうか？



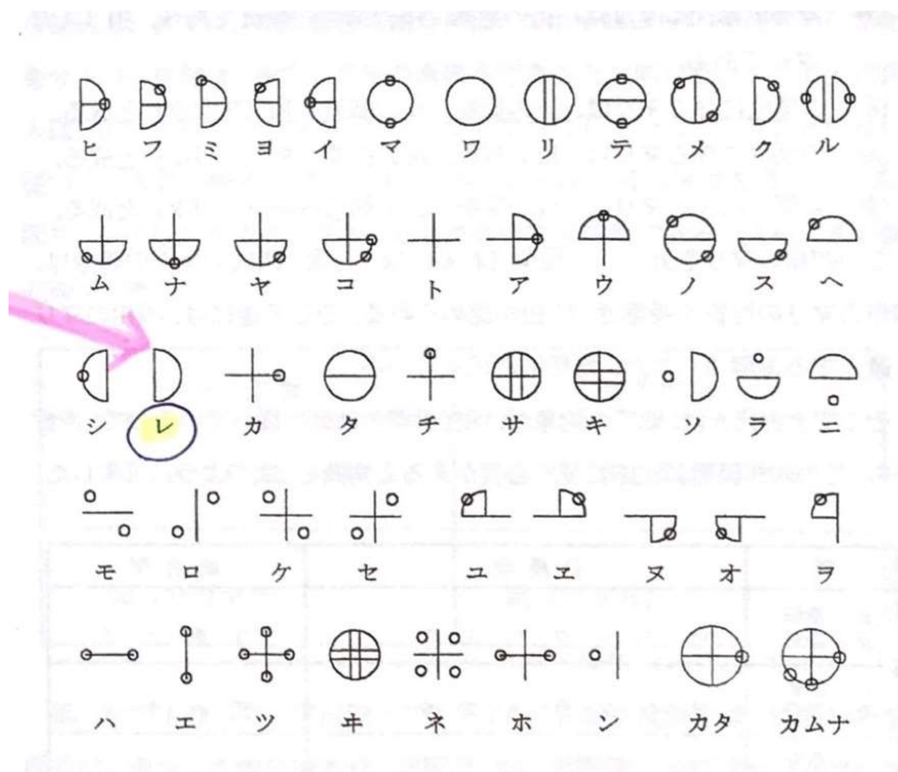
「ル」は分極を表すために横軸両端に穴が存在するが、「レ」は穴を持たない。

相似象会誌３号にはC（1,cd）図象が描かれているが、楢崎の「日本の物理学」という相似象会誌以前の講演記録と９号で公開された８０首のウタの内容を精査すると、「レ」に穴がないことがわかる。間違って使っている人が多い図象。

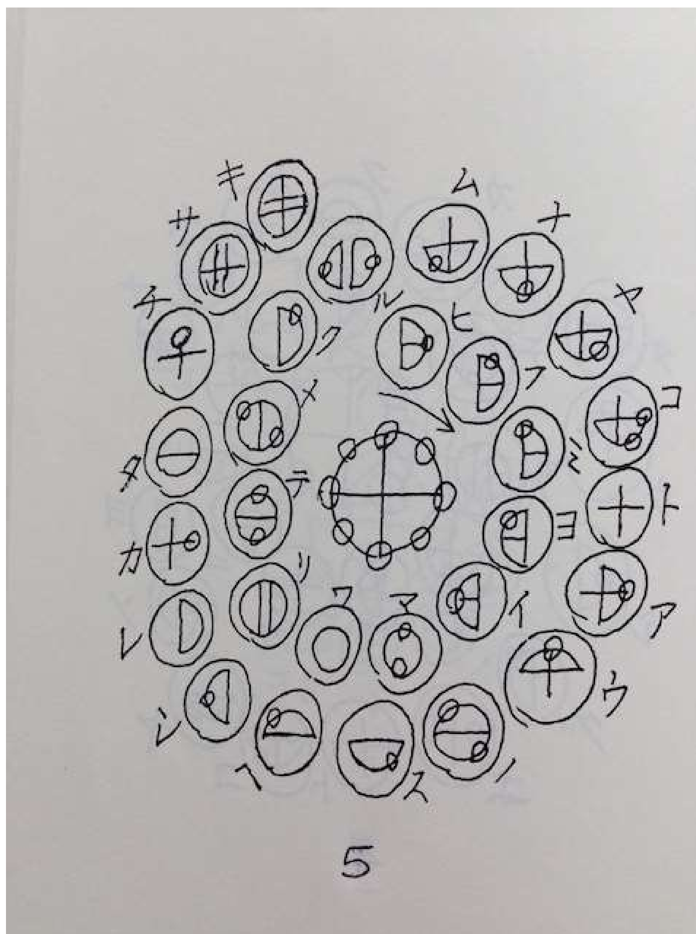
カタカムナ図象文字
（現行カタカナ文字の原型）

ヒ	フ	ミ	ヨ	イ		
マ	ワ	リ	テ	メ	ク	ル
ム	ナ	ヤ	コ	ト		
ア	ウ	ノ	ス	ヘ	シ	レ
カ	タ	チ	サ	キ		
ソ	ラ	ニ	モ	ロ	ケ	セ

52 相似象会誌３号



日本の物理学

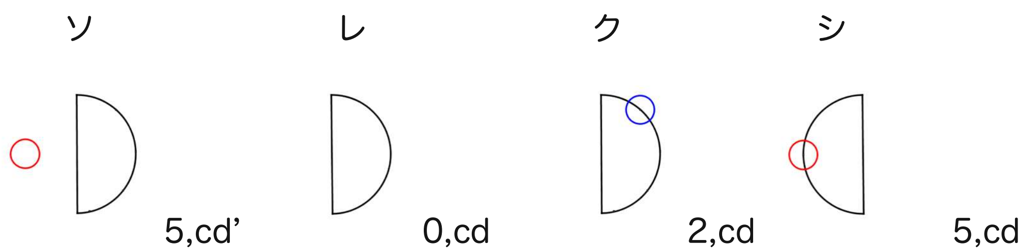


相似象会誌９号（５首）

６４首：ソレ・ツミ（c5 a1357）
７２首：ソレ・マ（c5 d37）　ワレメ（c48）
７６首：アマ・ワレマ（a137 c37）
８０首：ウツシ・ソレ・ヤス（a1357 c5 a8）

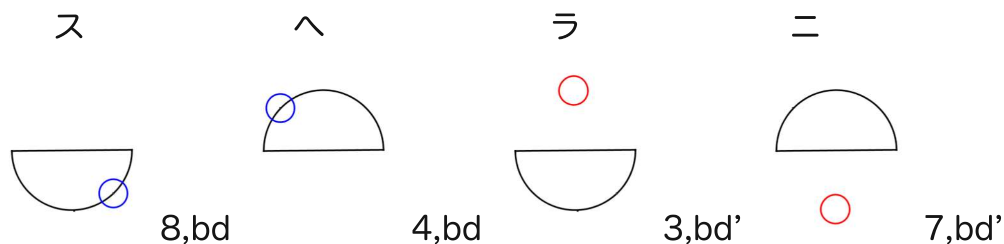
「レ」には、消失思念が働いているので、穴（小円）がないことでその働きを抽象している。現象側（シ）には、吹き出し口としての穴は存在するが、潜象側にはその必要はない、という物理を教えてくれている。

さらに、潜象側に縦半円をもつ別の声音符と比較検討することで、より明確になる。そこで、「ソ・レ・ク・シ」という４つの声音符を比較してみよう。



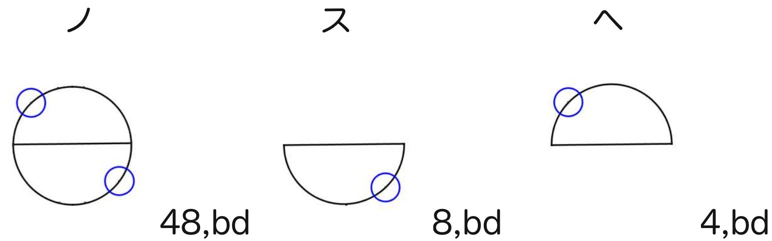
４８声音符で縦半円（横軸なし）を背景に持つ図象は、この４つだけ。そこで、大円円弧を自由に可動できる穴（小円）は、各象１つしかないと仮定すれば「レ」に穴は置けない。潜象側は、「ク」によって既に穴が占められている。「ク」に自由に可動できる思念が働くのは、このような構造・仕組みに起因する。

横半円（縦軸なし）を背景に持つ図象「ス・ヘ・ラ・ニ」について考察する。

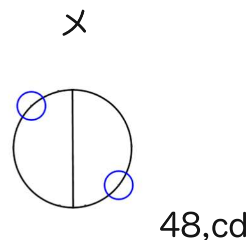


縦半円と同じで、大円円弧を自由に可動できる穴は、それぞれの背景に１つしか存在できないようだ。「ク・ス・へ」という小円偶数位置の共通性が判明。

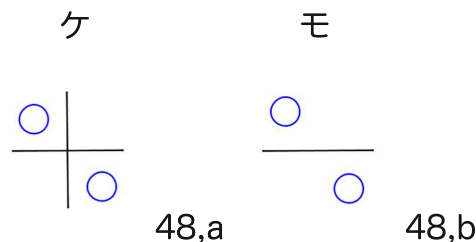
「ク・ス・へ」が出たので、次に、「ノ・ス・へ」の構造を検討する。



「ノ」＝「ス・へ」が見えてくる。「ノ」は、図象符にしても同じ象となる。「ノ」は、全体性を保って変遷循環する様子を抽象している。横軸で２分割した「ス・へ」は、それぞれの半円軌道内で自由に可動できることがわかる。「ノ」の横軸を縦軸に変換したものが、メ（48,cd）図象である。



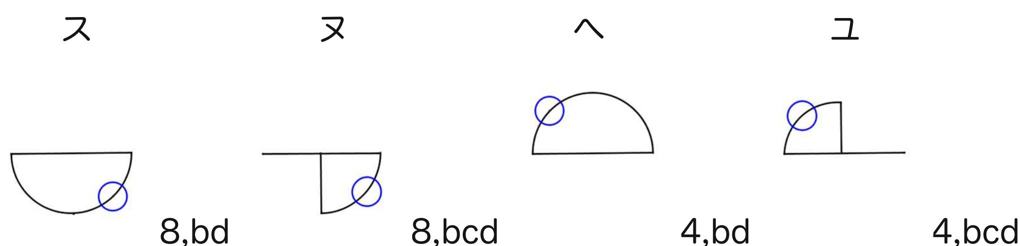
「メ」は、全体性を保ちながら時間性・エネルギー性の軸を持ち変化している様子を抽象。現象化に至るまでの兆しを示唆している。同じ穴の位置関係で、背景図象が異なる声音符が２つある。それが、ケ（48,a）・モ（48,b）図象である。



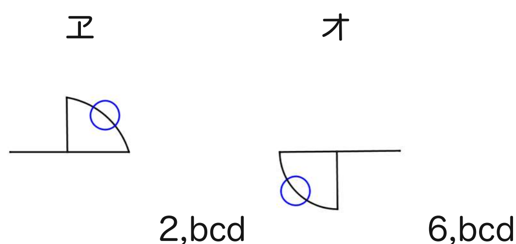
「ケ」は、大円がなく、十字が背景図象になっている。これは、「ト」を土台にした別系の働きを意味する。大円より、より深いところから作用している。穴の位置が同じなので、より深層の変化・変遷の影響を抽象している。

「モ」は、「ケ」から縦軸を取り除いた構造で、大円より、より深いところから作用を及ぼし物質性・空間性を発現する前段階にある状態を抽象している。モヤモヤとした不確定な存在を連想させる。

「ス・ヘ」と穴の位置関係が同じ声音符に、ヌ（8,bcd）・ユ（4,bcd）図象がある。半円構造から 1/4 円構造になり、縦軸が半分挿入されている。

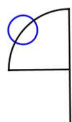


「ヌ（潜象）・ユ（現象）」は、「ス・ヘ」の半分の可動範囲となり、それぞれ異なった領域の情報を伝達する働きを抽象している。「ヌ・ユ」と反転関係にあるのが、ヱ（2,bcd）・オ（6,bcd）図象である。



「ユ・ヱ・ヌ・オ」の４つを束ねて、１つの声音符で表現したのがヲ（4,cbd-）図象である。「ヲ」には、４相性（双対性）の意味が重なっている。

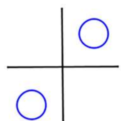
ヲ

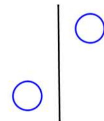


4,cbd-

「ヱ・オ」と同じ穴の位置関係にあるのが、セ（26,a）・ロ（26,c）図象である。どちらも、大円がなく、背景が十字か縦軸のみとなっている。

セ　　　　　ロ





26,a　　　　26,c

「セ・ロ」共に、大円より、より深いところからの影響を抽象している。
「ロ」の縦軸について、同じ背景を持つ図象が２つある。エ（37,c）・ン（5,c）図象である。

エ　　　　　ン



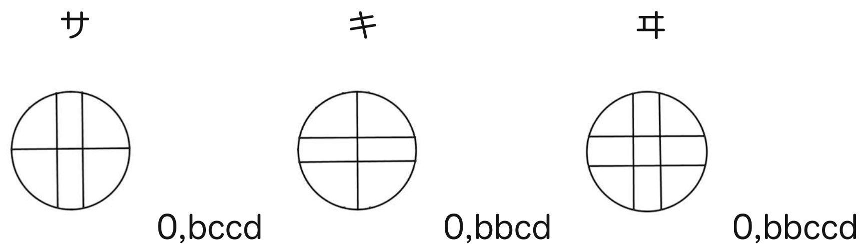


37,c　　　　5,c

「エ・ン」は、現象・潜象の境界の軸のみがあり、その境界部分からの情報伝達経路を抽象している。

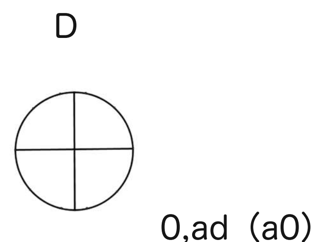
「ハ・エ」＝「ツ（1357,a）」と「モ・ロ」＝「ネ（2468,a）」という文献独特の表現がある。２つの直交した座標系（ツ・ネ）から、四元数を連想してみてはいかがだろうか。

次に、サ（0,bccd）・キ（0,bbcd）・ヰ（0,bbccd）図象について考察する。



３つとも、全体性を保ちながら、差分（サ）・傾斜（キ）・摂動（ヰ）などの複合的な状態を抽象。また、空間量（サ）・時間量（キ）・時空間量（ヰ）という縦横軸の変動性の意味も含む。どれも図象符にすると同じ象（D）になる。

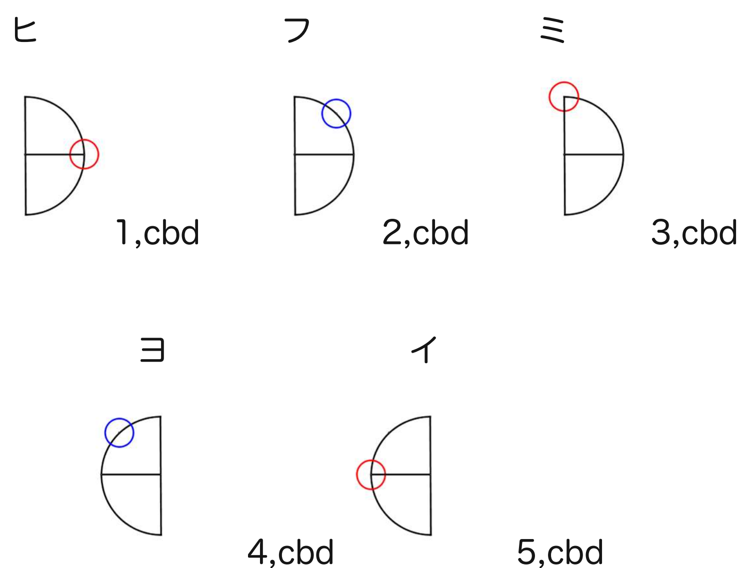
十字が大円の中に一つある図象。以下の D（0,ad）図象は、４８声音符の中には存在しない。これが意味するところは、この図象自身がヤタノカカミ図象の土台となって４８声音符を裏で支えている、と考えられる。１音に限定できない、汎用性がある特別な図象だと思う。



この「D」をベースに、さらに縦軸１本を加算した「サ」、横軸１本を加算した「キ」、十字１組を加算した「ヰ」という風に考えると、分割構造から発生する物理量の変動幅を知る、ある種の演算子的な働きを連想する。

日本語の数詞でおなじみの、ヒフミヨイムナヤコについて、声音符を考察する。

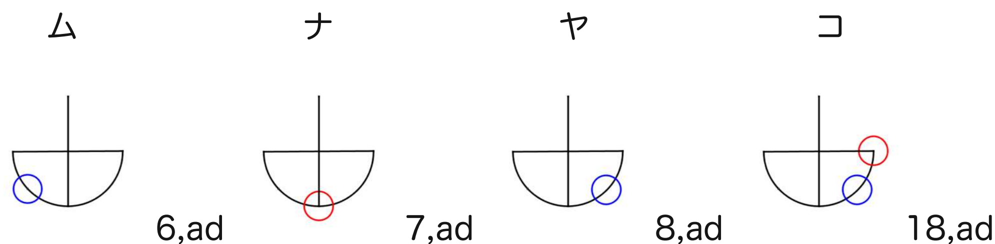
文献５首の最初の５音が、ヒフミヨイである。相似な背景図象（cbd）によって、ヤタノカカミ図象を縦割りして左回転している様子がわかる。



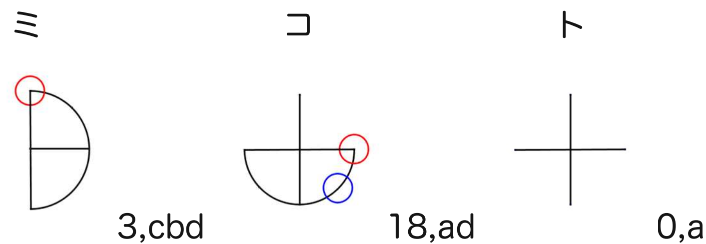
直線と交わる赤色の穴は、可動範囲が極端に狭い固定状態にある。それに比べ、直線と交わらず大円円弧の上にある青色の穴は、可動範囲が広く自由な分不安定な要素を孕んでいることがわかる。

ここで、着目していただきたいのが、「ミ」の穴の位置である。現象と潜象の境界（縦軸）に穴があり、他の４つの声音符とは異なる性質が強調されている。

次に、ムナヤコを見ると、相似な背景図象（ad）が浮かび上がる。今度は、ヤタノカカミ図象を横割りして左回転している様子がわかる。



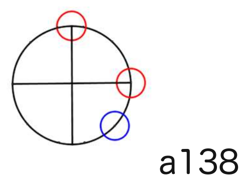
ここで注目していただきたいのが、コ（18,ad）図象である。なんと、４８声音符でたった一つだけ、赤と青の穴を同時に持つ図象であることがわかる。この図象が、系をまたぐ循環を抽象していることはご存知だと思うが、赤の穴が「ミ」と相似な位置に配置されていることに気づけるだろうか。



文献第３首で図象符強調されている「ミコト」の「ミ」と「コ」である。

ミコト

（ミコ・ウミコ・ヤタカミ・コトミチ・トコタチ）

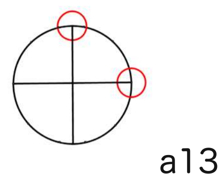


文献第２首で登場する図象符「カミ（a13）」の「ミ」が潜象内循環することで、初めて現象化への道筋が整うのである。

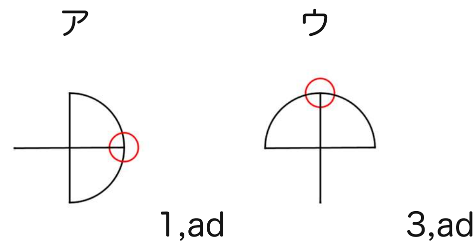
カミ

（アトウ・ウタヒ・カカミ・アウ・タカミ・カタチ・カラ）

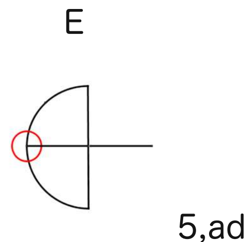
（アワチ・ミカヒ・ウヒ・カラミ・チカ・ミカ・ヒトミ）



ここからは、ア（1,ad）・ウ（3,ad）図象について考えよう。



「ア」の背景図象（縦半円）は潜象側にあるが、十字の横軸によって現象側に情報が伝達されていることを抽象している。「ウ」の背景図象（横半円）は現象・潜象をまたぎながら「ミ」の方向に穴がある。これが、現象生成への入口とみなせる。「ナ」は、「ウ」を反転した構造を持ち、還元方向に穴がある。

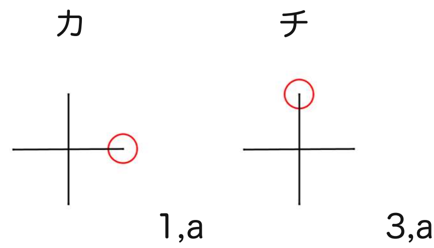


「ア」を反転した「E（5,ad）」図象のような声音符は存在しない。なぜか？

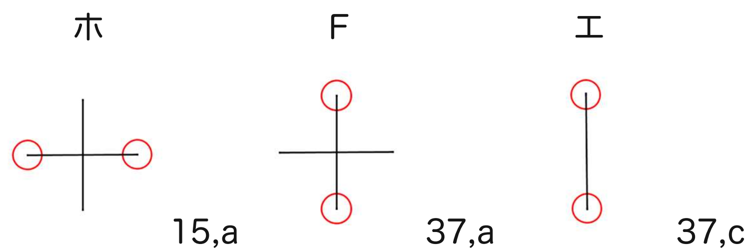
４８声音符を精査すると、現象側に背景図象がある図象群の数は、潜象側に比べて少ないことがわかる。これは、文献図象群がより潜象側に重要な構造や機構があることを示唆している。情報も元型が、潜象側にあることを意味する。

最後に、十字系をまとめる。大円円弧を含まない、ト（0,a）図象を背景に持つ声音符は、全部で８つ（「ト」を含む）ある。そのうち、すでに「ケ・セ」は登場したので、残り５つについて考察する。

「ト（十字）」から、方向性が現れた最初の段階を、カ（1,a）図象で抽象している。そこから、さらに現象方向へ持続的な情報の流れを抽象しているのが、チ（3,a）図象である。

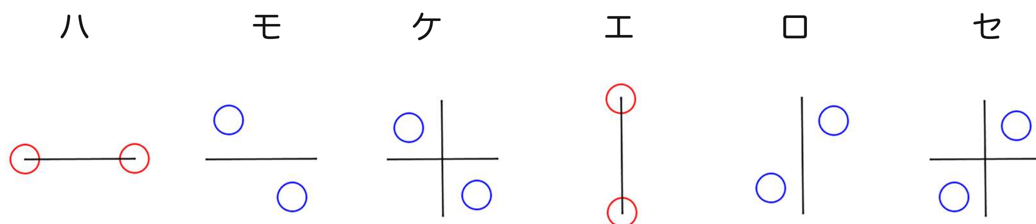


十字の横軸両端に穴が配置されたヤジロベイのような図象が、ホ（15,a）図象である。現象と潜象の両方に、バランスよく親和している様子を抽象している。



「F」のような図象は、声音符には存在しない。なぜか？

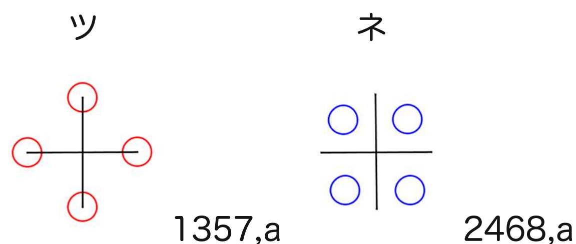
縦軸両端のみに穴があるのは、「エ（37,c）」図象だけ。「ホ」に相似な青系の図象を探索すると、「ケ」に辿り着く。同じように、「F」に相似な青系の図象が「セ」である。お判りいただけるだろうか？



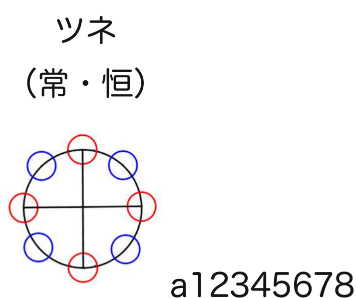
青系にあって、赤系にないのが「F」図象。赤は、その色が示すように表層に現れる事象（方向性を持つ）を抽象。青は、その背後にあって裏で支えている働きを抽象。表層と言っても、即＝現象というわけではないことに留意されたし。

カム（潜象）→アマ（潜象）→イマ（現象）という、３層構造に起因する。

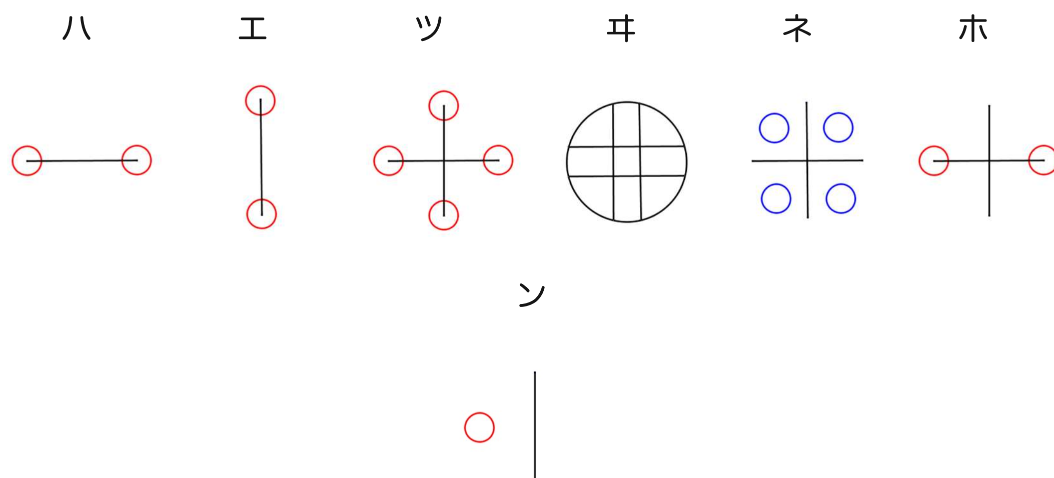
最後に、「ハ・エ」＝「ツ（1357,a）」と「モ・ロ」＝「ネ（2468,a）」の関係を考察する。



４８声音符で、唯一、穴が４つある図象である。赤系・青系それぞれに一つ。この２つの声音符を１つにした図象符が、ヤタノカカミ図象そのものとなる。



文献６首後半に、「ハエツヰネホン」という７音列がある。「ハエ」で「ツ」となり、「ヰ」を通じて「ネ」と疎通し、やがて「ホ」の働きで顕現するのが「ン」ですよ・・・と、文献は静かに語りかけてくる。



４８声音符の最初の音が「ヒ」で、最後の音が「ン」。「ピン」と来ましたか？
４８声音符の最後の２音が「ホン」。「ポン」と現れて来そうですね。

声音符の型について「ワ」から考察を始め、最終的には文献６首後半へと自然な展開ができた。声音符の型を知ることで、ヤタノカカミ図象の真意もより明確になる。ヤタノカカミ図象と４８声音符、これが文献研究の第一歩である。

声音符の型（２）

ここでは、４８声音符の別の分類（４分類）について紹介する。背景図象の主体がどこにあるのか、というキーワードで直線系を優先して分類してみた。

４８＝１３＋１６＋１７＋２

１：横軸わり（１３）

ハ・モ・ユ・ヱ・ヌ・オ・ノ・ス・ヘ・タ・
テ・ラ・ニ

２：縦軸わり（１６）

エ・ロ・ン・ヲ・ヒ・フ・ミ・ヨ・イ・シ・
リ・ル・メ・ソ・レ・ク

３：十字わり（１７）

ト・カ・チ・ホ・ケ・セ・ツ・ネ・ム・ナ・
ヤ・コ・ア・ウ・サ・キ・ヰ

４：大円のみ（２）

ワ・マ

興味のある方は、４つの分類から声音符の特徴を探求してみてはいかがだろうか。きっと、自分で書いて考えているうちに、思わぬ発見があるかも知れない。

文献研究の醍醐味は、自分の頭で考え、自問自答し、答えが腑に落ちるまでじっくり思考し続けることではないだろうか。安直に答えを求める悪い癖を治すには、最高の指南書かも知れない。抽象能力・連想能力・直観力を鍛えよう。

日本語５母音とプラトン立体

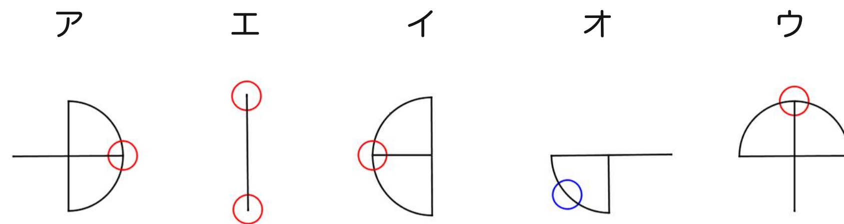
日本語５母音について、声音符とプラトン立体の関係を眺めてみる。

ア	イ	ウ	エ	オ
正１２面体	正４面体	正８面体	正６面体	正２０面体
（正五角形）	（正三角形）	（正三角形）	（正方形）	（正三角形）
広開口	横長口	尖口	縦長口	閉塞口

５母音に対応した声音符を見ると、ア・イ・ウ・エの４音はすべて赤の穴（小円）があるが、オだけ青の穴になっている。５音の最後が、閉塞気味で音列としては豊かさや華やかさにかけることがわかる。

本来ならば、ア（広開口）・ウ（尖口）という文献特有の音列が最も響きが良い。そこで、ア（正５角形）で始まって、ウ（正三角形）で終わる音列の中にエ（正方形）→イ（正三角形）→オ（正三角形）の順で発声することで全体の音列が生き生きと響くのではないだろうか。

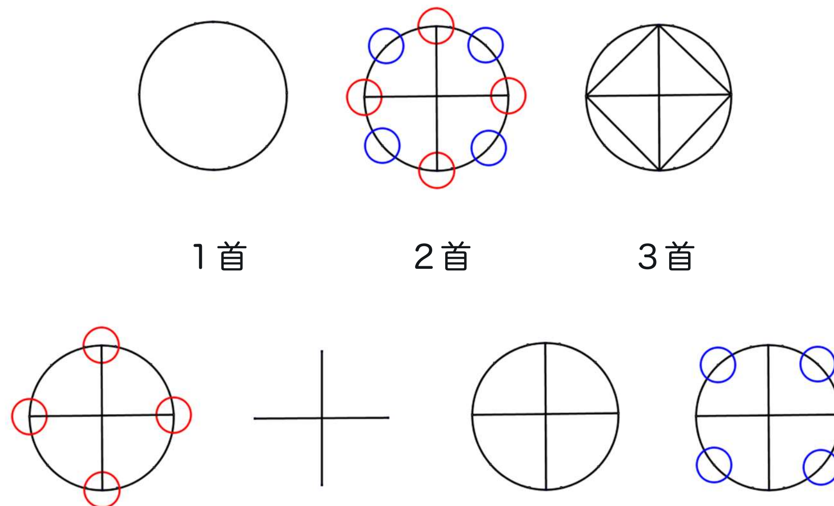
ア　　エ　　イ　　オ　　ウ



最後のウの音は、プラトン立体では正８面体に相当する。この正８面体は、宇宙空間に鳴り響く構造を持っている。宇宙空間を構成する最小単位の「気の粒（エーテル粒子）」のカタチそのもので、気を活性化させる作用があるようだ。

力場・電磁場・生命場

文献に示された３つの中心図象を考察すると、丸（ワ）と十字（ト）が抽象する基本物理としての力場・電磁場という「場」の型が読み取れる。その型を示すために、文献１・２・３首の中心に配置していたのかも知れない。



「ト」は、２直線の直交で構成され、力場（潜象）の直線運動を抽象している。「ワ」は、円（球）で構成され、電磁場（現象）の渦運動を抽象している。先行する力場が渦運動の骨格を形成し、その後から電磁場が生み出されると考えてみてはいかがだろうか。２つの場が統合（フト）して、生命場が誕生する。

文献２１首（フトマニ中心図象）に、以下のようなフレーズがある。

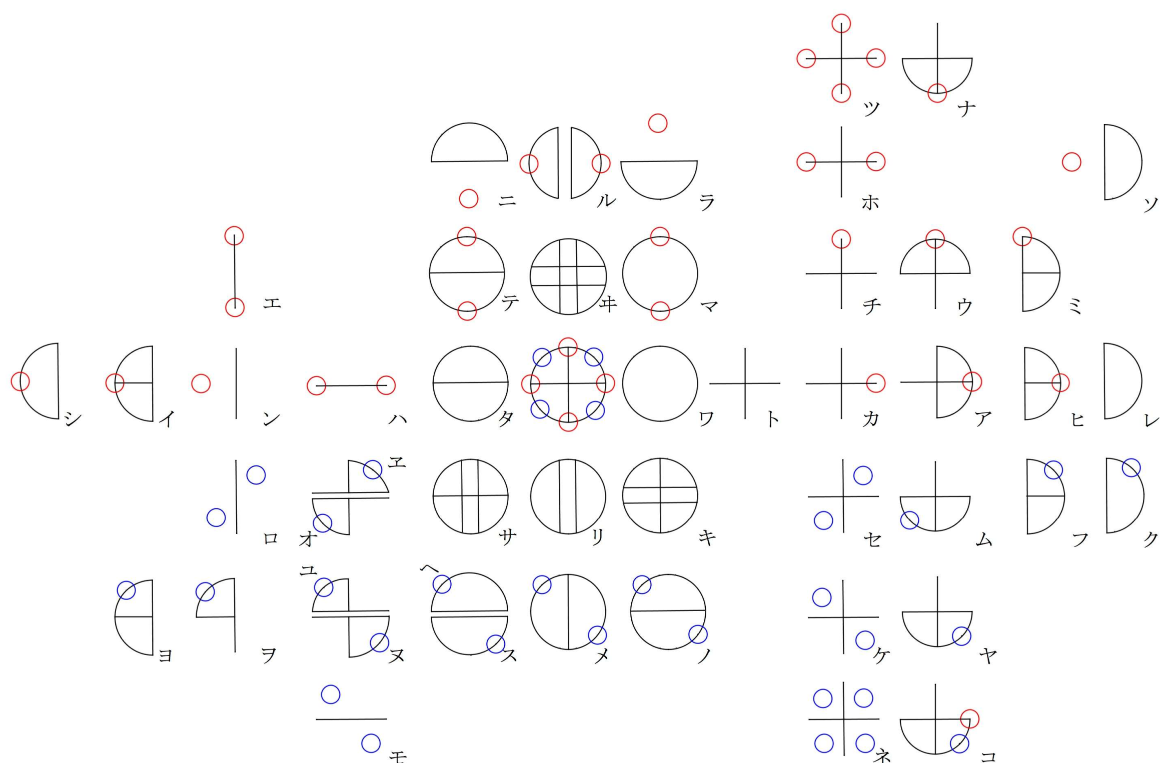
カタカムナ　ナミマリメクル　オホトコロ
a1a167　a37c37c12458　a156a1268

イ・モ・マ・ク・カ・ラ・ミ・ヌ・フ・ト・ヤ・マ・ト
a458　c237　a13　a38　a2　a378

a458＝電場・c237＝磁場・a13＝力場という型を設定すると、発生順序は、逆に、力場→磁場→電場となる。現象化する方向性が見えてきた。力場と

（電）磁場、この２つの関わりをしっかり念頭に置いて文献を探求していただきたい。

４８声音符の生成原理図



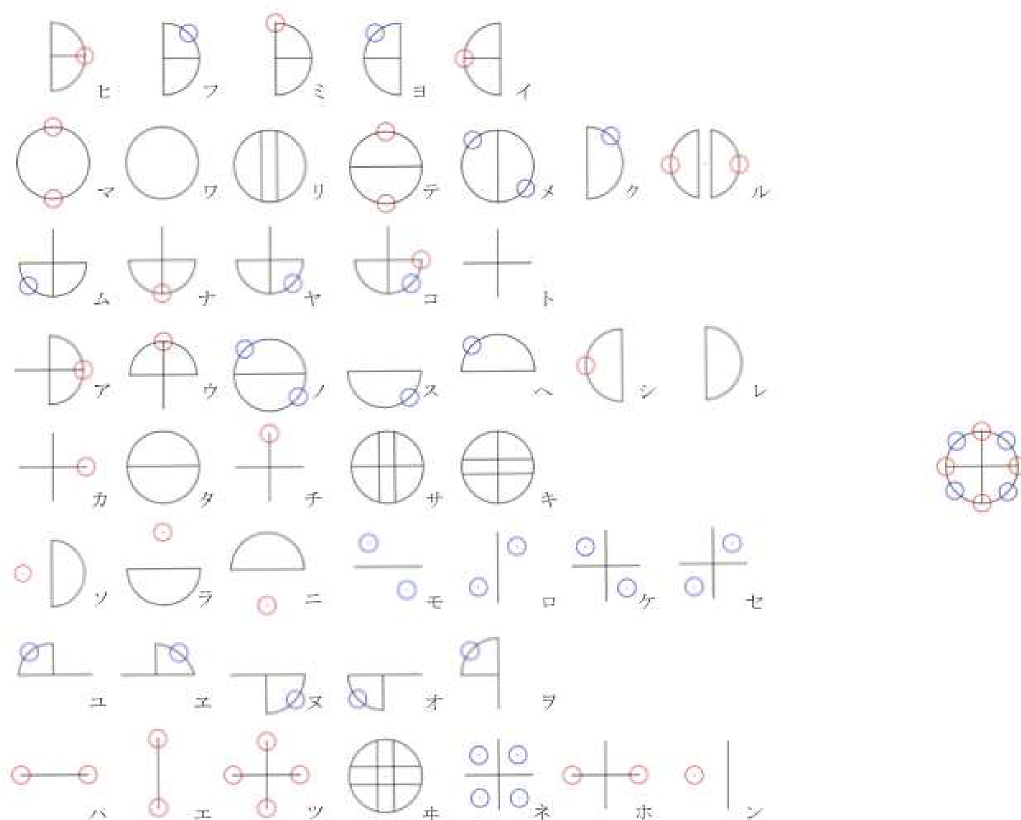
生成原理図（１）

声音符の背景図象と小円の位置を指標にして、丸（ワ）と十字（ト）からどのような変遷過程（シナリオ）で声音符が創られていったのか、その過程を視覚化した青天オリジナルが、生成原理図（１）である。

ヤタノカカミ図象という全体像と４８声音符という部分像、この関係性を念頭に、存在しない図象を想起してはその理由を探求するという手法で、４８声音符の生成原理を理解しながら、文献物理の真意を探求してきた。

小円を赤（奇数位置）と青（偶数位置）で色分けすることによって、声音符の個性が引き立ち、コ図象のような独特の声音符の存在が容易に認識にあげられ

るようになった。１−５・２−６・３−７・４−８という４つの軸（２つの直交座標）の存在も、色分けした図象によって明瞭になった。



生成原理図（２）

文献５・６首で記述されている４８声音符を、５・７・５・７・５・７・５・７の区切りで書き出したものが、生成原理図（２）である。このヒフミウタは、
単なる音列からその意味を抽出するだけでなく、そもそもの声音符の配置自体に生成原理の設計図が示されていたのである。

文献の記述には、このような工夫が至る所にある。

あとは、読者ご自身で、その設計図を書き出してみてはいかがだろうか。
答えは、目の前にあった。それが、この小論文の結論である。

後書

日本語の起源にまつわる古文献（カタカムナ文献）から、ヤタノカカミ図象と４８声音符なる図象群が発見解読され、相似象会誌３号（１９７１年１２月刊行）で公開されて今年で５１年目となる。日本語を話す日本人として、何気なく使っている日々の言葉に、純粋幾何が埋め込まれていた事実を知って驚きと感動を覚える。日本語は、決して曖昧な言語ではない。中国（漢字）由来の言語でもない。私たちの遥か昔の祖先が使っていた原日本語（高度抽象幾何言語）、もう一度、原点に還って、一から学んでみてはいかがだろうか。

デルタ株オミクロン株アナグラム
コロワクで自然免疫自爆テロ

横軸や軆大漁で実る瀬戸
縦軸やエロン虚ろな創世記

丸十字卵子精子の受精型
トは力場ワの渦磁場に命湧く

天体と素粒子同じ型世界
カタカムナヒヒキマノスヘヤタカカミ

追記
2024/3/12

日本語は高度抽象幾何言語だった
カタカムナ文字は前世宇宙の神語でもあり
今世宇宙のアルニラム星人が使っていた言語
日本には 12 万年前に
アルニラムの巫女によってもたらされた